

(調査報告) 教育における紙芝居の可能性を考える

—幼小連携を基軸として—

正 司 顯 好・前 徳 明 子

(research report) A Study of the possibility of the kamishibai in education

As cornerstone a Linkage between Kindergarten and Elementary School Curriculum

SHOSU Akiyoshi, MAETOKU Akiko

キーワード：幼小連携、紙芝居の特性、創り方、
演じ方

1. はじめに

幼小連携については、全国でさまざまな取り組みや研究が進められている。しかし、その取り組みの進捗については、それぞれの教育の環境や状況によってさまざまである。

平成 25 年 3 月、文部科学省初等中等教育局幼児教育課「平成 24 年度 幼児教育実態調査」¹⁾ では、市町村ごとの幼小接続の状況として、ステップ 0 (連携の予定・計画がまだ無い。) は、10.7% (187 箇所)、ステップ 1 (連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。) は、8.7% (151 箇所)、ステップ 2 (年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。) 62.1% (1082 箇所)、ステップ 3 (授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。) 13.8% (240 箇所)、ステップ 4 (接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。) 3.2% (55 箇所)、幼稚園・保育所ともに未設置 1.5% (27 箇所) となっている。

「各市町村における幼稚園・保育所の学校教育・保育と小学校教育との連携・接続の状況について

は、「ステップ 2」が 62.1% (1,082 市町村) と最も多く、「ステップ 3」、「ステップ 0」、「ステップ 1」、「ステップ 4」と続く」ということから、80% 近くが何らかの形で連携・接続の取り組みが行われているものの、具体的に内容をみると、その内の 60% 近くは、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていないことから、まだ本当の意味での連携につなげていくことが難しいと言えるのではないかと。

「幼小連携の実態とあり方について」²⁾ の中で、幼小連携の交流の内容は、運動会、音楽会 (学習発表会)、収穫祭などの行事交流、小学校の「総合的な学習の時間」や「生活の時間」における授業交流や休み時間を利用した日常的な交流、入学予定の園児が小学校に慣れることを目的とした給食体験、入学体験などが行われている。

その効果として、「子ども同士の交流を通して、幼稚園児は、期待を持って小学校に入学するようになり、小学生は、園児に頼られる経験をもつことで自信を持ち小さな子に優しく接するようになる。学級での人間関係も広がり、明るい生活態度に変容するといった姿がみられるようになった」という効果が報告されていた」ということである。

「国語力の育成」に関して、平成 17 年 2 月 15 日の中央教育審議会³⁾ では、「学習指導要領の見直しに当たっての検討課題」として示された 14 項目の中に「国語力の育成」があり、そこでは「国語力」は「すべての教科の基本」と位置付け

られていた。その後、「国語力の育成」は、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の「審議経過報告」⁴⁾(平成18年2月)等においても中核に位置付けられた。平成19年8月には言語力育成協力者会議の「言語力の育成方策について(報告書案)」⁵⁾が中央教育審議会に報告された。同報告書案においては「言語力は、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力」であり、「言語力の育成を図るためには、(中略)学習指導要領の各教科等の見直しの検討に際し、知的活動に関すること、感性・情緒等に関すること、他者とのコミュニケーションに関することに、特に留意すること」などと提言している。

八幡(2017年)⁶⁾は、「紙芝居を保育者が演じることによって子どもたちは紙芝居の世界に浸り、登場人物に共感したり感動を得たり考えたりすることができる。そして子ども自身が今まで体験したことがない事柄や現実の世界のなかでは体験できない事柄に触れることで不思議さを感じ、未知の世界への想像力を深めていく。」と述べ、その後、「加えて、紙芝居を聞くことにより言葉の育ちが深まっていくのである。」とし、保育者が演じて、見せることの重要性和共に、子ども自身が紙芝居などの児童文化財と関わることで言葉の獲得にもつながっていくことを述べている。

従って、国語力審査育成において、紙芝居を演じることは、子どもの文章を読む力、自己を表現する力を育むことにつながり、紙芝居を観ることは、聞く力、物語世界を受容しさらに発展させる想像力を育むことにつながっていく重要な教材の一つであると考えられる。

末藤(2010年)は、「『言葉』に着目した「幼小連携」に関する研究の意義－教育政策の動向から－」⁷⁾で、「言葉は子どもたちの保育や教育の基盤となるものであり、近年は国際的な学力調査の結果分析などを通して、子どもたちの言語能力がさまざまな視点から注目を集めている。その意味でも言葉に着目して幼小連携のあり方を検討

していくことは、連携の質を問うことにもなる。」と述べている。このことから、幼小連携のプログラムを考える上で紙芝居が教材として使われることの必要性や重要性に繋がるのではないかと考える。

2. 紙芝居の特性

まついのりこ⁸⁾は、紙芝居は「共感」をもたらすだけでなく「共感の感性」を育む文化財だと述べている。この「共感の感性」を育む特性は、画面が一枚一枚バラバラな紙芝居であるからこそその特性であり、ぬくという紙芝居特有の表現方法から生みだされるという。

また、まついは、「紙芝居は、ぬくことによって、演じ手の腕の動きと画面は、いつも観客の視野に入り、観客のいる現実空間に画面が出てくる。ここでいう現実空間とは、演じ手と観客のいる「場」のことをさしている。次に、現実の空間の中で、演じ手と観客は作家の世界を共有し、「作家の世界への共感」を深め、強める。観客は共感によって作家の世界を自分自身のものとしていき、そのよろこびが「共感の感性」を育てていくというのである。つまり、作品は、ぬくことによって現実空間に出ていき、「場」で共有、共感される。観客はこの共感をよろこびと感じ、「共感の感性」が育つというのである。

共感できる力は、コミュニケーションを支える基盤ともいえる。紙芝居は、共感力の育成を担う文化財と言えないのではないだろうか。

加藤繁美⁹⁾は「紙芝居は集団で体験することを前提に作られているため、1対1の関係性とは別の面白さが要求される。実際、街頭紙芝居では、最高に面白い「場の空気」が創り出されていた」という。

「観客と演じ手が醸し出す空気と、観客の間に生成する空気とが一体化する心地よさ、こうした集団の心地よさが紙芝居にはある」とし、「時には話の筋そのものは忘れても、仲間と時間を共有した風景は残っていく」とも述べている。このよ

うに、加藤は、紙芝居が創り出す「集団の場の心地よさ」に紙芝居の特性があると主張している。

仲間と過ごした場の心地よさが身体感覚に残るということは、その後の社会生活にとっても貴重な体験となるであろう。保育現場においても、こうした「場」の心地よさを子どもに提供できるならば、紙芝居の価値は見直されるのではないだろうか。紙芝居の創り出す「場」の存在には注目していきたい。「心地よい場」の提供は紙芝居の特性であり、役割でもある。

3. 調査の概要

(1) 調査目的

幼小連携教育を推進していくなかで、スムーズな連携を成功させるために紙芝居(特性、創り方、演じ方)を導入し、その効果を明らかにすることを目的として調査を行った。

(2) 調査対象

埼玉県加須市立志多見小学校の児童

埼玉県加須市立志多見幼稚園の園児

(埼玉県加須市は、公立小学校の敷地内に公立幼稚園が併設されており、小学校の校長が幼稚園の園長を兼務している。また、小学校の教頭は、幼稚園の副園長を兼務している。)

(3) 調査方法

小学校と幼稚園の交流行事に参加する中での公立小学校の校長兼園長への聞き取り調査、小学校、幼稚園で特別授業、講師として参加しながら、児童に質問紙を配布し、紙芝居(特性、創り方、演

じ方)についての回答を得た。

(4) 調査時期

平成26年3月～平成26年10月まで。

(5) 調査内容

A. 紙芝居を観て楽しむ(幼児、児童、教師)

B. 紙芝居の特性を知る(幼児、児童、教師)

C. 紙芝居を演じて楽しむ(児童)

4. 調査の結果

A. 紙芝居を観て楽しむ(幼児、児童、教師)

○幼小連携での取り組み

幼小連携の取り組みについて実際の現場でどのようなことが行われているのか把握しながら、スムーズな連携を成功させるために紙芝居が果たす役割や必要性を探ることを目的とした。

* (公立小学校の校長兼園長への聞き取り調査を含む)

日時：平成26年3月3日

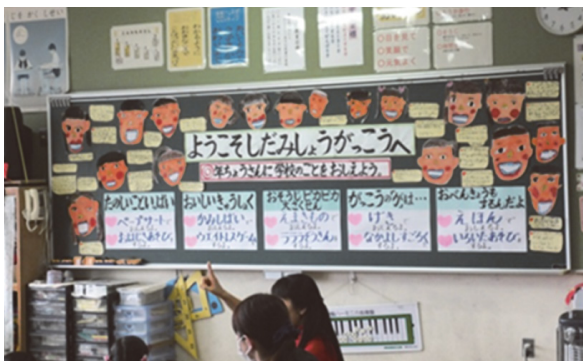
対象：埼玉県加須市立志多見幼稚園の園児1歳～5歳(11名)、幼稚園教諭(3名)

埼玉県加須市立志多見小学校の児童1年生(20名程度)、教員(1名)

ねらい：紙芝居をみんなと一緒に観て楽しむ。

紙芝居：「こぶたのけんか」作：高橋五山、絵：赤坂三好

大型絵本：「へんしんトンネル」あきやまただ



資料画像1. (「学校ごっこ」の内容について、黒板に書かれている。)



資料画像2. (1年間の学校生活を紙芝居説明している。)



資料画像 3. (給食について)



資料画像 4. (大型絵本「へんしんとんねる」)

し (著)

手遊び:「ごんべさんの赤ちゃん」

埼玉県における幼小連携活動について、平成26年3月3日に加須市立志多見小学校の保幼小連携活動「学校ごっこ」単元:「もうすぐ2年生」～ようこそ しだみしょうへ～に1日参加し、現地調査を行った。

午前中は、子どもたち主体で行う活動内容で、10時から11時まで「学校ごっこ」:ピカピカ大作戦-そうじの仕方、学校のきまり、昔の遊び、おいしい給食、色板で遊ぼうを行い、11時からは、プレイルームで遊ぶ(3つのめばえかるた)を行った。

具体的には、午前中の活動として、タイトル「学校ごっこ」「もうすぐ2年生」～ようこそ しだみしょうへ～とし、コーナーを5つ(ピカピカ大作戦-そうじの仕方、学校のきまり、昔の遊び、おいしい給食、色板で遊ぼう)作って、児童が何名かずつ、それぞれのコーナーを担当し、小学校で行われていることを園児がプレ体験するという活動内容になっていた。その後、プレイルームに移動し、1年生と園児がまざり、いくつかのグループにわかれて、3つのめばえかるたを行った。活動後、一緒に給食を食べた。

午後については、紙芝居「こぶたのけんか」(正司担当)、大型絵本「へんしんとんねる」(前徳担当)、手遊び「ごんべさんの赤ちゃん」(前徳担当)などの実演を行い、実際の子どもたちと関わりその状況を体験しながら調査を行った。

具体的には、こちらが用意した紙芝居「こぶた

のけんか」、大型絵本「へんしんとんねる」、手遊び「ごんべさんの赤ちゃん」を実演することで、小学生と園児が一緒になって楽しむことができた。また、実演後には、小学生が感想を述べている姿をまねて、園児たちも自分の言葉で話しをする姿がみられ、園児たちの小学生へ憧れる様子が活動の中から伺えた。

*「校長への聞き取り調査」の質問事項とその回答は、以下の通りである。

1. 幼小連携を通して、子ども達に変化が見られるか(保育園、幼稚園、小学校のすべての子どもたちに変化が見られている。)
2. どのような変化が見られるか(活動にいきいきと参加する意欲、人と関わろうとする姿、それぞれが人を思う気持ちが変化した。)
3. 今後も行っていくか(もちろん今後も行っていく。その中では、教職員、保護者、地域との連携も必要になる。)
4. 幼小連携にどのようなことを期待するか(教職員、保護者、地域との協力のもと、「生きる力」「かかわる力」「学ぶ力」の3点をポイントとして、子どもたちが育ってほしい。)

結果として、連携活動を通し、小学生たちもいきいきとし、自信をもつとともに、これから入学してくる1年生への期待へとつながっていく様子がみられるようになるとのことである。今回は、座り方が小学生と園児がわかれていたが、混ぜた状態で見えていくと、周囲の友達同士で関わる中で異年齢児の関わりができ、スムーズな接続へつながっていくのではないかと考えた。

今後、「紙芝居を通した幼小連携ができないか」という提案をしたところ、近隣の保育園や幼稚園に行き、読み聞かせをおこなったりもしているため、難しいことではないが、現場の先生方とよく相談し、前向きに検討したいとのこと。今後の計画をたて、具体的な幼小連携の活動内容と紙芝居の子どもたちへの影響を考えながら、幼小連携の可能性を探っていこうということになった。

○志多見幼稚園での取り組み

日時：平成26年6月12日

対象年齢：埼玉県加須市立志多見幼稚園の1歳～5歳(11名)

ねらい：紙芝居について知る、紙芝居をみんなと楽しむ

紙芝居：「おおきくおおきくおおきくなあれ」

脚本・絵：まついのりこ(資料画像5)、

「ごきげんのわるいコックさん」脚本・

絵：まついのりこ(資料画像6)、「あひ

るの王さま」脚本：堀尾青史、画：田島

征三

平成26年6月に1歳～5歳(11名)の園児たちに対し、ねらいを「紙芝居について知る、紙芝居をみんなと楽しむ」として、紙芝居の指導を行った。

○志多見小学校での取り組み

日時：平成26年6月12日

対象年齢：埼玉県加須市立志多見小学校の児童4年生(25名)、5年生(35名)、教員3名

ねらい：紙芝居について知る、紙芝居をみんなと楽しむ

紙芝居：「おおきくおおきくおおきくなあれ」

脚本・絵：まついのりこ、「ごきげんの

わるいコックさん」脚本・絵：まついの

りこ、「あひるの王さま」脚本：堀尾青

史、画：田島征三

平成26年6月に5年生(35名)、4年生(25名)のクラスで、ねらいを「紙芝居について知る、紙芝居と絵本の違いを知る、紙芝居をみんなと楽しむ」として、紙芝居の指導を行った。内容は、

まず、「おおきくおおきくおおきくなあれ」、「ごきげんのわるいコックさん」、「あひるの王さま」を演じてみせることで、紙芝居の楽しさを共有する体験をし、その後、「紙芝居ってなんだろう?」、「絵本と紙芝居の違い」について説明した。

「おおきくおおきくおおきくなあれ」と「ごきげんのわるいコックさん」は、参加型の紙芝居で、子ども達と一緒にかけ声をかけたりする場面もあり、子ども達の感想に「みんなと一緒に参加できて、とても楽しかった。」「自分も演じてみたいと思った。」「わたしもまねして作ってみたいです。」という感想も聞かれた。4年生が、後日書いた感想には、以下のような感想があった。(表1)

表1 (埼玉県加須市立志多見小学校4年生)

参加型紙芝居		物語型紙芝居
「おおきくおおきくおおきくなあれ」	「ごきげんのわるいコックさん」	「あひるの王さま」
<p>○「参加型の紙芝居で、心をつにして声を出してたのしかった。」「紙芝居は、みんなのいきをあわせて心をひとつにするお話なんだと思った。」</p> <p>○「大きく声をだしてとっても楽しかったです。」</p> <p>○「ぶたが大きくなって、たまごからきょうりゅうが出てきて、とてもおもしろかった。」</p> <p>○「みんなでおおきなこえを出して、おおきくなって、<u>気持ちよかったです。</u>」</p> <p>○「みんながおおきくおおきくおおきくなあれ」と全部大きくなって、おもしろかったです。」</p> <p>「声を合わせると、クラスがまとまるんだなあと思いました。」</p> <p>○「いつもは、<u>読んでもらうだけだけど、今日は、「おおきくおおきくおおきくなあれ</u>とか言えるので良かったと思いました。」</p> <p>○自分がさんかできる紙芝居があるってしてびっくりしました。</p> <p>○おおきくなあれと言ったら大きくなったからビックリしました。」</p>	<p>○「コックさんでもらったあめ(空想)がとてもあまくてすごくおいしかったです。」</p> <p>○「なにがおもしろかったというとおかお(コックさん)がとてもおもしろかったからです。」</p> <p>○「<u>最初はおこっていてどんだんにこになつていったのがおもしろかったです。</u>」みんなが「コックさん、こっちむいて」と言ったからご機嫌がよくなったと思いました。」</p> <p>○「<u>ぼくは、緑色のメロンあじのキャンディを食べました。おいしかったです。</u>」</p> <p>○「いつもえがおがいいことがわかりました。」</p> <p>○「コックさんの顔がカクンとした形になったり、くねくねしたり、いろいろな顔になったから、とてもおもしろかったです。」</p> <p>○「コックさんのひょうじょうがガクガクになったりして、<u>すごくおもしろくて、思わず大わらいしてしまいました。</u>」</p> <p>○「ごきげんのわるいコックさんが、<u>笑顔になったのがうれしかった。</u>」</p> <p>○「わたしは、みんなで協力をして、ふきげんになっていたら、「ごきげんになって」といい、<u>クラス全員がやさしくにこにこえがおになるようにくふうします。</u>」</p> <p>○「いつもいばってばかりでなく、いつもニコニコしていた方がいいなと思いました。」</p>	<p>○「あひるの王さまでは、<u>みんな</u>で力を合せたから、<u>国の王に勝</u>てました。」</p> <p>○「<u>お金をもらって返さないのは、わがまま。</u>」</p> <p>○「<u>こまった時に助けてくれる仲間</u>がいる。わたしもみんなと仲良くします。」</p> <p>○「<u>みんなが小さくなってあひるの口</u>に入って王様をたおした所がとてもおもしろかったです。」</p> <p>○「<u>ちからをあわせると、いいことがある</u>ことがわかりました。」</p> <p>○「<u>悪いことをしたら、ちゃん</u>とバチがあたるんだなあと思いました。」</p> <p>○「<u>みんなと力をあわせてやる</u>ことが大事ということを学んだ。」</p> <p>○「<u>みんな</u>で協力したら、なんでもできることがわかりました。」</p>

参加型紙芝居「おおきくおおきくおおきくなあれ」では、みんなで心をつにして、声を出すことで、「声を合わせると、クラスがまとまるんだなあと思いました。」という感想にまでつながっている。また、いつもは、受け身である紙芝居体験が主体的に参加できたことで、楽しい体験になっている。また、みんなの掛け声により、絵が本当におおきくなるのが嬉しかったようだ。また、もう一つの参加型紙芝居「ごきげんのわるいコックさん」では、ごきげんが悪かったコックさんの表現・技法やその後、ご機嫌がよくなる場面へ展開していく様が楽しかったようだ。また、ご

きげんがよかった後で、「コックさんがペロペロキャンディを作ってくれたので、みんなにもあげるよ。キャッチしてね。」と声をかけたことで、まるで本当にキャンディがあるかのように、みんなで食べるマネをした。そのみんなで食べた(空想)キャンディがおいしかったという感想が多かった。コックさんのご機嫌がよくなったことの喜びと、甘いキャンディを食べる時の幸せな気持ちが重なったのではないだろうか。「あひるの王様」では、仲間と協力し、何かをやりとげることの大切さややりとげた後の爽快さなどについての感想が多くみられた。



資料画像5. (紙芝居「おおきくおおきくおおきくなあれ」を演じている様子)



資料画像6. (紙芝居「ごきげんのわるいコックさん」を演じている様子)

B. 紙芝居の特性を知る

○教員研修 (資料1～3)

日時：平成26年4月

対象：埼玉県加須市立志多見幼稚園の教諭2名、埼玉県加須市立志多見小学校の教員10名(校長・教頭含む)

ねらい：紙芝居の特性について知る

紙芝居：「おおきくおおきくおおきくなあれ」
脚本・絵：まっいのりこ、「ごきげんのわるいコックさん」脚本・絵：まっいのりこ、「あひるの王さま」脚本：堀尾青史、絵：田島征三

幼稚園と小学校の教員10名(校長・教頭含む)に向けて、教員研修を行った。ねらいは、「紙芝居の特性について知る」で、これから「紙芝居を通した幼小連携」を行っていくにあたり、まず、子どもに指導していく教員たちが紙芝居についての知識を学び、その特性についても共通理解しておく必要があるからである。まず、紙芝居の特性

として、「①作品世界が現実空間に出ていき広がる。」「②集中とコミュニケーションによって、作品世界の共感が生まれる」について説明し、演じるための技法などについての解説をした。その後、参加型の紙芝居「おおきくおおきくおおきくなあれ」、「ごきげんのわるいコックさん」と物語完結型「あひるの王さま」の3つの作品を紹介した。研修後、「三面舞台を使うことで、話が観客の所に出てきて広がる紙芝居の効果がよくわかった」、「参加型の紙芝居は、大人も楽しめるが特に子ども達が楽しめそうだ」、「紙芝居は、大勢でみて、共感できるものだというのを改めて理解できた」、「自分の紙芝居作りを通して、子ども自身が自分の振り返りができることそして、演じることで、みんなの前で表現できること、そのことを通じて、自信につながっていく」などの感想が聞かれた。

○志多見小学校での取り組み

日時：平成26年6月25日

対象クラス：埼玉県加須市立志多見小学校5年生(35名)

ねらい：紙芝居について知る、紙芝居と絵本の違いを知る、紙芝居をみんなと楽しむ。

紙芝居：「おおきくおおきくおおきくなあれ」
脚本・絵：まっいのりこ、「ごきげんのわるいコックさん」脚本・絵：まっいのりこ、「あひるの王さま」脚本：堀尾青史、画：田島征三

日時：平成26年9月

対象クラス：埼玉県加須市立志多見小学校4年生(25名)、5年生(35名)

ねらい：紙芝居を観て、みんなと一緒に楽しむ
紙芝居：「みんなでぼん！」脚本・絵：まっいのりこ(資料画像7)、「おだんごコロコロ」作：坪田譲治、絵：二俣英五郎(資料画像8)

平成26年6月に5年生(35名)、4年生(25名)のクラスで、ねらいを「紙芝居をみんなと楽しむ」として、紙芝居の指導を行った。内容は、「みんなでぼん!」、「おだんごコロコロ」を演じ

てみせることで、紙芝居の楽しさを共有する体験をした。参加型紙芝居「みんなでぼん！」は、みんなで声を合わせ、「みんなでぼん」と声を揃えることで、丸、三角、四角の中からいろいろなものがとびだす。「次は、何が出てくるのかな？」



資料画像7.（「みんなでぼん！」を演じている様子）

その後、紙芝居と絵本の違いについての解説をした。まずは、子どもたちに、紙芝居と絵本は、どこが違うのかヒントを与えながら、クイズ形式で答えてもらった。その際は、（形式）演じ手と観客が必要、（進行）画面を抜き、差し込む、（脚本と絵）表が絵、裏が文字、（作品世界）舞台から飛び出し広がるといこと、（特性）共感の感性を養うという特性があり、「絵本」には、（形式）観客一人でも成立、（進行）ページをめくる、（脚本と絵）一画

と思うドキドキした期待をみんなで共有した。物語完結型紙芝居「おだんごコロコロ」は、お話の中でお地蔵さんのふりをしたり、鬼ができてきたりとユーモラスなお話をみんなと共有し、楽しむことができた。



資料画像8.（「おだんごコロコロ」を演じている様子）

面に文字と絵、（作品世界）引き込まれる、（特性）個の感性を養うという特性があることについて、児童にわかりやすく違いに気づくように説明しながら進めていった。

その後、紙芝居と絵本の違いがどのくらい理解できたのか確認するため、違いについて書いてもらった。

埼玉県加須市立志多見小学校5年生（35名）に絵本と紙芝居の違いについて答えてもらった結果は、以下のものであった。（表2）

表2（埼玉県加須市立志多見小学校5年生）

絵本と紙芝居の違い			
紙芝居		絵本	
紙の後ろに字がある。	18	絵と字が一緒。	18
演じる。	18	読み聞かせる。	18
バラバラで一枚ずつ。	9	とじられていて、1ページずつ。	7
大勢でみることができる。	8	少人数でも。	5
みんなと楽しめる。	1	一人でも読める。	9
ぬきとさし。	5	めくる。	3
大きい。	3	小さい。	3
参加できる。	1	飛び出すものがある（立体）。	1
裏に演じる時の注意などが書いてある。	1	閉じたり、あけたりできる。	1
絵だけがみえる。	1	いつでもすぐ読める。	1

この調査の中で紙芝居については、「紙の後ろに字がある」、「バラバラで1枚ずつ」、絵本では、「絵と字が一緒」、「とじられていて、1ページずつ」と、それぞれの形式の違いについての気づきが多く、続いて、紙芝居は、「演じる」、絵本は、「読み聞かせる」などそれぞれの技法についての意見が多くでた。また、その他では、紙芝居は、「大勢でみることができる」「みんなと楽しめる」で、絵本は、「少人数でも」「一人でも読める」などのそれぞれの特性についての意見も出ていた。

C. 紙芝居を演じて楽しむ

日時：平成26年10月24日

対象クラス：5年生(35名)

ねらい：紙芝居を演じる楽しさを知る

紙芝居：「おおきくおおきくおおきくなあれ」

脚本・絵：まついのりこ、「おおさまさぶちゃん」作・絵：馬場のぼる



資料画像9(演じ方の話を聞く様子)

演じ方については、作品世界を大切にしながら観客に手渡すためにどのように演じたらよいのかというポイントを見童にわかりやすく説明した。

その後、ねらいを「紙芝居を演じる楽しさを知る」として、紙芝居：「おおきくなあれ」脚本・絵：まついのりこ、「おおさまさぶちゃん」作・絵：馬場のぼるの2つの作品をグループごとに練習し、その後、代表者2名がそれぞれ紙芝居を演じた。演じた2名に感想を聞いてみた。「おおきくなあれ」を演じた見童は、「参加型の紙芝居なので、みんなと声を合わせて演じることが楽しか

った」、「ぬき」と「さし」が観ている時は、簡単そうにみえたけれど、難しかった」「みんなの方をみるのが、難しかった」などで、「おおさまさぶちゃん」を演じた見童は、「いろいろな役を演じるのが難しかった」「ぬき」、「さし」がむずかしかった」「演じていて楽しかった」などの感想が出た。演じた見童についてクラスの他の見童に感想を聞いてみると、「声の大きさやはやさがちょうど良かった」「楽しそうに演じていたので、自分も楽しかった」「堂々と演じていて、よかった」「みんなにあわせて演じていて、すごかった」など、グループで練習を行っていたため、演じることのポイントや演じ手の気持ちもわかり、みんなまで共有できる時間となった。

5. おわりに

平成26年11月より、「紙芝居を創って楽しむ」の活動に入っている。子どもたちは、自分の紙芝居を考えていく中で、「手作り紙芝居を友達の前で演じてみよう」、「幼稚園児の前で演じてみよう」についての取り組みが今後の課題になっていることを意識し、活動に取り組んでいる。

末藤(2010年)は、「言葉」に着目した「幼保小連携」に関する研究の意義—教育政策の動向から—¹⁰⁾で、「なかでも、新しい時代に必要とされる「思考力・判断力・表現力等」を育成するには、言語を基盤とする多彩な学習活動が不可欠となることから、言語能力への注目が高まっている。」と述べている。

紙芝居創りを通し、「自分を表現すること」、「自分をふりかえること」、「考えること」、「判断すること」などの体験ができることや、紙芝居を演じることにより、「表現する力」、「達成感」、「自信」そして何より、その場の仲間との「共感」が体験できたのではないかと考える。紙芝居を通した幼小連携の可能性は、今後さらに広がるだろう。

引用文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課『平成24年度幼児教育実態調査』2013. 3
- 2) 「幼小連携の実態とあり方」
2009,p45www.u-gakugei.ac.jp/~shouichi/
report//houkoku syo-03.pdf
- 3) 大伴 潔「小 1 プロブレム研究推進プロジェクト」報告書 東京学芸大学 2010. 3
- 4) 文部科学省「学習指導要領の見直しに当たっ
ての検討課題」2005, 2.15
- 5) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程
部会「審議経過報告」2006. 2
- 6) 八幡眞由美「児童文化財の保育における効用
に関する一考察～領域言葉の側面から紙芝居
を中心に～」2017, p46
- 7) 末藤美津子「「言葉」に着目した「幼保小連
携」に関する研究の意義－教育政策の動向から
－」東京未来大学研究紀要第3号 2010, p45
- 8) まついのりこ「紙芝居・共感のよろこび」童
心社 1998, pp11-18
- 9) 加藤繁美「物語の力」『紙芝居－子ども・文
化・保育』一声社, pp154-155
- 10) 7) と同じ

正司顯好 (埼玉東萌短期大学教授)

前徳明子 (埼玉東萌短期大学講師)